古今類句

淺井文庫

拾玉集四　秋よりもさらにあはれなる人のこゝろ

む

風雅雜上　かくてさもあるべきにこそ月前
千載秋下　我門乃杉もたゝかぬ夜半の嵐
新古今雜上　ふるさとは人もかよはぬ道なれや
隣古今雜上　いつとなくこゝろぼそくもなりにけり
同冬　さらでだにあはれなるべき夕暮を
狹衣一　ひとりもながめつるかな
詞花雜上　いつとなくこゝろぼそくもなりにけり
隣古今雜上　さらでだにあはれなるべき夕暮を
拾玉集七　よのなかのありにもあらぬ身をしれば
新古今　ながらへばまたこのごろやしのばれむ
拾玉集七　うきにもつらきにもなほながらへて
新古今　世の中よ道こそなけれ思ひ入る
拾玉集七　よのなかのありにもあらぬ身をしれば
新古今　ながらへばまたこのごろやしのばれむ
拾玉集七　うきにもつらきにもなほながらへて
新古今　世の中よ道こそなけれ思ひ入る
拾玉集七　よのなかのありにもあらぬ身をしれば
新古今　ながらへばまたこのごろやしのばれむ
拾玉集七　うきにもつらきにもなほながらへて
新古今　世の中よ道こそなけれ思ひ入る

淺井文庫

従二位家隆卿　花月百首
皇太后宮大夫俊成　花月百首
花月百首　源通具
花月百首　源為昌
花月百首　源通光
花月百首　源具親
花月百首　源家長
花月百首　源雅経
花月百首　藤原定家
従二位家隆卿　花月百首
皇太后宮大夫俊成　花月百首
花月百首　源通具
花月百首　源為昌
花月百首　源通光
花月百首　源具親
花月百首　源家長
花月百首　源雅経
花月百首　藤原定家

新勅三 ひさかたの雨ふる野辺の草木さへ花よりのちの色ぞあはれなる 権中納言公雄
玉葉秋歌 ながめつつ思ふものから秋の月なほあかずのみ袖にやどれる 前大僧正慈円
続後拾遺秋上 みなひとのながめつくせる秋の月なほ我のみ袖にやどれる 前大僧正慈円
大和物語 わがやどのかきねもとめる花すすきほにいでぬ物は人の恋しき
同 一とせにみつるときあるものなれや秋の月見る人の多き
同 我ばかり物思ふ人はあらじとや空行く月の夜ごとにやつる
同秋歌 行く末は空も一つの武蔵野に草の原よりいづる月かな 平城天皇御製
山家集下 としごとに月をながめて過ぎぬれど今宵ばかりの空はなかりき 二条太皇太后宮肥後
同 独のみ月を見る夜はいにしへの秋も今宵の心地こそすれ 大納言経信
新勅秋上 吹きとほす風の通ひ路絶えぬれば月をやどせる袖も露けし 権中納言長方
古今秋下 吹きくれば秋の草木はしをれつつ露を玉にぬく糸ぞなき 文屋朝康
新拾雑上 草木ゆゑ分けし心はなけれども秋の露のみ置きまさるらん 崇徳院御製
玉葉雑二 秋ごとに露こそ色はまがふらめ袖ほど物は争はねども 前大納言公衡
新勅秋下 秋くれば風の通ひ路吹きとぢよ声聞くからに目こそ覚むれ 読人しらず
続後拾雑上 常よりも袖のみぬるる秋の夜は月の光のかごとなりけり 前大納言公衡

玉葉雑二 みよし野の岩もとすげやかげ清し月の出汐の山の端の空 前大僧正慈円
同雑四 第六天の魔王我が身に来りて妨をなせども 法眼源雅
新葉雑中 この業もとをれば我が心より起こるなれば懺悔すれば罪消滅すと 後京極摂政前太政大臣
仮撰雑一 妻よきて松ふく嵐ふきみだる久方月もむら雲の空 後京極摂政前太政大臣
玉葉雑一 秋ごとに月もむら雲ながめわび袖ほど物は争はねども 後京極摂政前太政大臣
風雅雑四 極楽を祈るこころは深くとも西の空にぞ月は入りぬる 後京極摂政前太政大臣
続古今哀傷 うきふしもしらぬ袂に置く露は涙の玉の緒にぬけるかと 僧都源信
同 拾遺愚草上 さえわたるむらの砧に夜もすがら月を待つ身の袖ぞ寒しも 摂政太政大臣
拾遺愚草員外 ながめこし袖の涙の露ながら玉の緒にぬく秋の白玉 摂政太政大臣
新後拾遺雑中 墨染の袖の涙の露ながら玉の緒にぬく秋の白玉 法眼源兼
新後古今雑中 むすびおきし袖の涙の露ながら玉の緒にぬく秋の白玉 権大納言為定
新千載雑中 むすびおきし袖の涙の露ながら玉の緒にぬく秋の白玉 前大僧正尊円
壬生二品 村雨風をまつ間の露ながら玉の緒にぬく秋の白玉 大江宗秀
拾遺愚草上 ながめこし袖の涙の露ながら玉の緒にぬく秋の白玉 大江宗秀
新後拾遺 ながめこし袖の涙の露ながら玉の緒にぬく秋の白玉 大江宗秀

新千載上　釈阿　年ふかき松の老をも思ひわすれ
拾遺貴部上　すみそめの袖のみ雪の朝ぼらけ
同　　乃至　みな人のたもつ法の花の色
後拾遺釈教　あさぢふの露のやどりに秋くれて
拾玉集一　あるじ忘れぬ軒の梅が香
後古今雑下　ふるさとの花のみ春の面影に
新古今雑下　ふるさとは荒れにしままの庭の面に
玉葉釈　ふるさとの軒端の梅ぞ
後拾雑春　ふるさとの花の匂ひに
千載雑中　ふるさとも見しにはあらぬ春の色を
古今春下　ふるさとは花こそ昔忘れざりけれ
新後古春　ふるさとは花ぞ昔の香に匂ふ
月清集上　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月
拾遺哀傷　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月
千載雑中　ふるさとも見しにもあらぬ秋の月
古今春下　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月
新後古春　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月
月清集上　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月
拾遺哀傷　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月
千載雑中　ふるさとも見しにもあらぬ秋の月
古今春下　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月
新後古春　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月
月清集上　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月
拾遺哀傷　ふるさとは見しにもあらぬ秋の月

新古雑下　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
千生二京中　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
後拾雑春　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
新後古雑　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
月清集上　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
拾玉集五　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
同尺教　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
後古今秋下　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
新後古雑　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
後古今雑上　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
新後古雑　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
千載雑中　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
古今春下　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
新後古春　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
月清集上　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
拾遺哀傷　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
千載雑中　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
古今春下　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
新後古春　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
月清集上　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭
拾遺哀傷　ふるさとへ帰る人のそでをだにぬらさぬ袖の涙かな　法橋顕昭

新千載上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
拾遺貴部上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
同　　乃至　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
後古今雑下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
拾玉集一　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
後古今雑下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
玉葉釈　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
後拾雑春　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
千載雑中　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
古今春下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
新後古春　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
月清集上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
拾遺哀傷　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
千載雑中　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
古今春下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
新後古春　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
月清集上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草
拾遺哀傷　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草

新千載上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
拾遺貴部上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
同　　乃至　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
後古今雑下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
拾玉集一　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
後古今雑下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
玉葉釈　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
後拾雑春　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
千載雑中　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
古今春下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
新後古春　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
月清集上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
拾遺哀傷　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
千載雑中　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
古今春下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
新後古春　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
月清集上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
拾遺哀傷　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持

新千載上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
拾遺貴部上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
同　　乃至　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
後古今雑下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
拾玉集一　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
後古今雑下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
玉葉釈　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
後拾雑春　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
千載雑中　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
古今春下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
新後古春　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
月清集上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
拾遺哀傷　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
千載雑中　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
古今春下　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
新後古春　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
月清集上　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持
拾遺哀傷　ふるさとを荒れはてぬとも忘れ草　中納言家持

山家集下　みをしれは人のうらみもなかりけり　むかしは海こそちらしはてけれ
拾玉集二　ひろさはの池の波にも月さえて　むかしをうつすかけそのこれる　一条院内侍
千載雑中　いつとなく我よのうさをしるかほに　むかしにかへるたもとなりけん　前中納言資仕
新千載　今はとてわすれやはてんかくしつゝ　むかしなからの代々のふることは　入道前内大臣
新続古今　此ころのなかめにつけて思ひしれ　むかしかはらぬ月そ見えける
続古雑中　渡すとも波のたちゐにおもふかな　むかしかたりの浦の松かえ　月花門院
同秋　なれやきくまつの世をかけてまつらん　むかしかたりのことの葉も　前太政大臣
新後拾雑　なからへはまたこのころやしのはれん　むかしかへらぬ浦の浜波　前大納言為家
同雑下　大井河ゆく瀬の波をおもふにも　むかしはなれし君かゆくすゑ　法皇御製
壬生二品集　わきもこか袖ふる山の桜花　むかしのまゝの宿の春風
拾玉集又　法の水心のうちにせきいれて　むかしのまゝの世をそおもふ
続古雑下　石上ふるの中道なか〳〵に　むかしのかたみまつそともなき
風雅雑上　見ぬよまてかゝるおもひをしらせつゝ　むかしかはらぬ秋の月かけ　源具親朝臣
続千載四　春の夜の夢にもみえよ忘れすは　むかしかけたる玉の緒の　後京極摂政前太政大臣
新拾雑中　ありし世のなこりをしらぬ事もなし　むかしにかへる秋の夜の月　為道朝臣
続古羇旅　都にて千鳥のこゑをきゝなれし　むかしにかへれ袖の浦浪　入道二品親王法守
拾遺愚草　あやなくもなれしよまての風のおと　むかしかはらぬまつのしつえに　式乾門院御匣
続千載四　今はたゝ我をもしのへ人もまた　むかしをこふるあはれもそする　平泰氏

拾遺愚草　さのみやはわか身ひとつになけくへき　むかしを今に忍ふ人とて
壬生二品中　ぬれてほす袖もかはかぬ冬の夜に　むかしをしのふ宿の月影
拾玉集四　ゆめさめてねられぬまゝにきく鐘の　むかしを思ふ秋の夜のそら
新葉雑上　うき世にはあつめしのちもいつまてか　むかしおもへは袖そぬれける
拾玉集四　うつの山たちかへる路のうちしくれ　むかしをこひて衣ほすかな　京極前太政大臣
新後拾遺雑　松風の音にも夢のさめぬれは　むかしをしのふ声のみそする　恵慶法師
新千秋下　なか月や雲井の秋のいたつらに　むかしをおもふ袖の露けき　後京極院内侍
新続古今　みちのくのいはての山のいはつゝし　むかしをたれかしのはさるらん　拾遺心永縁
拾遺集上　むかしより春のなかめにあかすして　むかしといまのはなのいろかな
新後雑下　かくしつゝすきにし年をおもふにも　むかしといまのひかりをそしる　平親氏
拾玉集又　君すめはむかしのあとの水清く　むかしとかはらぬ世にやすむらん　寂蓮
拾遺愚草上　かはらしなこの池水にすむ月の　むかしよりてる光ならなん
続後撰夏　今はとて忘るゝ草のたねをたに　むかしのためにとめてをかなん　藤原基忠
月清集下　大和なるいかにいはれのおもかけは　むかしちきりし雲のうへ人
山家集下　すむ人のこゝろをそむるかけなれは　むかしにかへる月やすむらん
伊勢物語　いにしへの人のこゝろをたつぬれは　むかしをとふは涙なりけり
新後拾遺　身のうさをいかにせよとか年をへて　むかしをいまにしのひつゝ　藤原為成
続拾雑下　なかき夜の露のあはれをかたらはは　むかしをいまにおもひいてなん

新古雑上　左　みわたせば柳桜をこきまぜて　都ぞ春の錦なりける　素性法師
新続古　対　あれにけり賤のをだまき繰返し　昔を今に思ひよせつつ　雅経卿
山家集上　わすれつもむかしの露を袖にをきて　山のはの月に昔をかこつかな　西行法師
続後撰雑上　捨てのみ人の厭ふ世なれども　なほ恨めしき秋の夕暮　後鳥羽院
拾玉集四　ありあけの月の光を待ちいでて　我が山の端に入る心かな　慈円
新葉羇旅　都をば霞とともに立ちしかど　紅葉をぞ見る手向山かな　菅原為長
月清集上　玉津嶋あしべの千鳥なく声に　夜ぶかき月の袖にうつれば　藤原家隆
続後撰雑中　今もかも都の空や恋しきに　ながめてすぐす秋の夜の月　後鳥羽院
新古雑下　思ひきや我もふるさと荒れはてて　人だのめなる宿の秋風　藤原定家
続古今雑下　いつしかと荒れまさるべき宿の萩を　露だに置かぬ人ぞ恨むる　後鳥羽院
新勅雑一　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　後鳥羽院
拾玉集五　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　慈円
続後撰雑下　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　後鳥羽院
拾玉集三　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　慈円
新古雑上　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　後鳥羽院
続古春上　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　後鳥羽院
新続雑下　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　後鳥羽院
続拾秋下　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　後鳥羽院
拾玉集四　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　慈円
風雅雑下　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　後鳥羽院
続後撰雑下　ながめやる袖の涙や染めつらん　秋の木の葉の散りまがふ色　後鳥羽院

壬生二品　春ごとに今をさかりと見る花の　色にぞ人の心あくまで　大納言師頼
新続雑下　見ても猶山ぢの春ぞ恋しきを　今日を限りの花の色かな　九條院
新古春上　あやめ草引きつる袖の露ながら　今日を限りの花の色かな　上西門院兵衛
同　今日を限りの花の色かな　按察使公通卿母
新続雑下　あやめ草引きつる袖の露ながら　今日を限りの花の色かな　大納言公任
古今雑下　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　実定
新勅雑一　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　大納言公任
拾玉集五　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　慈円
続後撰雑下　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　後鳥羽院
拾玉集三　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　慈円
新古雑上　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　後鳥羽院
続古春上　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　後鳥羽院
新続雑下　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　後鳥羽院
続拾秋下　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　後鳥羽院
拾玉集四　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　慈円
風雅雑下　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　後鳥羽院
続後撰雑下　知らざりき雲井のよそに見し人を　今日を限りの花の色かな　後鳥羽院

拾遺恋三　　法印慈円

月清集上　　秋くる朽木春のひかりあれ

新古今上　　いつれをかいつれ花とも分ねとて

後拾遺雑春　　老の涙もいきうゑん

同　　うき身猶思ひ捨てし秋の月

風雅雑中　　いつれをかいつれ花とも分ぬとて

大和物語　　きてもふれとそ思ふ雪の

千載雑上　　住まもかりのやとりと世の

後拾遺雑四　　いつくにか有明の月

後撰雑二　　人ふるさとの庭の面

風雅雑四　　あらしさそふ花の行衛

山家集下　　ともなひてこえし山路

新古雑上　　月のすむ雲の

同雑中　　年あれ花を待ちえて

新後撰雑中　　さ時や我代の松のふるに

千載雑上　　さ涙やちとせをかねて

後撰雑二　　うつり人のこころの秋のそら

新拾遺上　　おもひきや雲居の月を

拾遺雑春　　桜のちるに風やうつるら

新後撰雑上　　人こそあらし春は昔の

同雑下　　花てふる我のみやふるとも

拾遺雑上　　あらしさそふ花のゆくへは

壬生二品上　　桜乃風のうきにやあるらん

拾玉集七　　あらしさそふ花のゆくへは

拾遺雑春　　あけぬとて帰る雲路の

拾玉集七　　世をそむく苔の衣の

拾遺雑上　　世をそむくもとならすまし

拾玉集二　　おもかなきあの桃乃色のそら

後撰雑二　　桜ちるこのしたかせに

新拾遺下　　いつくにか有明の月

新葉雑上　　いつれをかいつれ花とも

新拾雑上　　ふるさとの庭の面

後拾雑上　　をしめとてとまらぬ春の

後撰雑中　　別路山あひの雲をなに

後撰雑上　　老ぬとてこえし山路を

慈円　　法印慈円

月清集上　　秋や朽木春のひかりあれ

新古今上　　いつれをかいつれ花とも分ねとて

後拾遺雑春　　老の涙もいきうゑん

同　　うき身猶思ひ捨てし秋の月

風雅雑中　　いつれをかいつれ花とも分ぬとて

大和物語　　きてもふれとそ思ふ雪の

千載雑上　　住まもかりのやとりと世の

後拾遺雑四　　いつくにか有明の月

後撰雑二　　人ふるさとの庭の面

風雅雑四　　あらしさそふ花の行衛

山家集下　　ともなひてこえし山路

新古雑上　　月のすむ雲の

同雑中　　年あれ花を待ちえて

新後撰雑中　　さ時や我代の松のふるに

千載雑上　　さ涙やちとせをかねて

後撰雑二　　うつり人のこころの秋のそら

新拾遺上　　おもひきや雲居の月を

道命法師　　桜ちるこのしたかせに

伊勢大輔　　人こそあらし春は昔の

後撰雑二　　花てふる我のみやふるとも

後拾遺雑四　　あらしさそふ花のゆくへは

三條院御製　　あけぬとて帰る雲路の

増基　　世をそむくもとならすまし

千載雑上　　おもかなきあの桃乃色のそら

後撰雑二　　桜ちるこのしたかせに

新拾遺下　　いつくにか有明の月

新葉雑上　　いつれをかいつれ花とも

新拾雑上　　ふるさとの庭の面

後拾雑上　　をしめとてとまらぬ春の

後撰雑中　　別路山あひの雲をなに

後撰雑上　　老ぬとてこえし山路を

道命法師　　道命法師

伊勢大輔　　伊勢大輔

後拾遺雑四　　人こそあらし春は昔の

後撰雑二　　花てふる我のみやふるとも

後拾遺雑四　　あらしさそふ花のゆくへは

三條院御製　　三條院御製

増基　　増基

千載雑上　　世をそむくもとならすまし

後撰雑二　　おもかなきあの桃乃色のそら

新拾遺下　　桜ちるこのしたかせに

新葉雑上　　いつれをかいつれ花とも

新拾雑上　　ふるさとの庭の面

後拾雑上　　をしめとてとまらぬ春の

後撰雑中　　別路山あひの雲をなに

後撰雑上　　老ぬとてこえし山路を

尊氏　　尊氏

天台座主　　天台座主

道命　　道命

中務　　中務

具平親王　　具平親王

法華経　　法華経

難文救上人　　難文救上人

和泉式部　　和泉式部

花山院御製　　花山院御製

玉葉集廿
同雜四
續後拾雜中
長秋詠藻上
風雅雜中
新古今傳
新勅雜一
拾遺愚草
拾遺集上
拾玉集二
後古今集
新後古今
拾遺集上
後拾遺集
新後拾遺
新勅雜上
大和物語
玉葉雜四
新千載
長秋詠藻
後拾遺集
新勅雜上
大和物語
玉葉雜四
新千載
長秋詠藻
後古今
月清集上

赤染衛門
大貳三位
後三條院
通宗朝臣
負えのみこ

源重之
大貳三位
後三條院
通宗朝臣
源道濟

拾玉集五　和哥の浦にしのあまのかる[illegible]跡　むかしをかけて[illegible]

大和物語　思ひきやむかしの[illegible]　むかしのみこそこひしかりけれ

玉葉雑二　さゝ波の志賀の大わだよどむとも　むかしの人にまたもあはめや　人麿

同雑四　いにしへやよみこし松の[illegible]　むかしのひとのふみかよふらむ　傳通法師

新古雑下　[illegible]　むかしにかへる[illegible]　壬生忠見

玉葉雑四　[illegible]　むかしの人を[illegible]　西行法師

新勅雑三　別れにし日より[illegible]　むかしにかへる[illegible]　中院右大臣家

金葉雑上　うきねの[illegible]　むかしおもひを[illegible]　修理大夫顕季

続後拾雑上　梅花さけるあたりにゆめ[illegible]　むかしの人はきゝてやあるらん　朱雀院御製

山家集　咲そむる花を一枝まづおりて　むかしの人のためとおもはん

古今夏　さつきまつ花たちはなのかをかけは　むかしの人の袖のかそする　よみ人しらず

伊勢物語　[illegible]　むかし人の袖のかそする

月清集上　山さとに[illegible]　むかし人の名残[illegible]

拾玉集一　郭公花橘のかをとめて　むかしの人の[illegible]

拾遺百首　秋の夜の月にこゝろ[illegible]　むかし人のかけとゝむる池水

新後撰雑中　[illegible]老の[illegible]　むかしの人の[illegible]　後京極摂政

拾遺愚草　みるたびに[illegible]　むかしのひとの[illegible]　光明皇后

千載春上　[illegible]　むかしの[illegible]　従三位[illegible]

拾玉集二　[illegible]　むかしの人の[illegible]　よみ人しらず

拾遺恋四　[illegible]川[illegible]　むかしのひとの[illegible]

拾玉集三　秋風や[illegible]川の末の波　むかしの[illegible]

月清集上　[illegible]野[illegible]　むかしの[illegible]一本

新古今哀傷　[illegible]　むかしおもふて袖[illegible]　[illegible]法師

[illegible]　[illegible]　むかしおもへて[illegible]月[illegible]

早蕨　[illegible]　むかしおもひ[illegible]

後撰雑一　[illegible]　むかしおもふ[illegible]　七条后

新古今哀傷(?)　吹風に花[illegible]　むかしおもふ[illegible]　寂然法師

[illegible]　[illegible]　むかしおもふ秋の[illegible]

続拾雑上　[illegible]　むかしおもひ[illegible]　円[illegible]法師

新葉春上　[illegible]月　むかしおもふ[illegible]　[illegible]

新古雑下　[illegible]　むかしおもひ[illegible]袖[illegible]　よみ人しらず

拾玉集四　[illegible]　むかしおもひ[illegible]

玉葉雑五　[illegible]　むかしやいまの[illegible]　[illegible]大臣

続古春上　[illegible]　むかしやおもふ[illegible]　[illegible]

拾遺恋五　[illegible]山[illegible]　むかしと[illegible]

続後拾雑中　[illegible]　むかしやかへて[illegible]　[illegible]

続古今一　かすみあかぬ人の　むかしやぬしく　権中納言定家
新後拾遺　隔てし世の　むかし海に　信生法師
同釈教　たちかへる　むかしの　津守国基
新続古今　志賀の浦や　むかしにかへる　殷富門院大輔
続拾遺雑秋　あつまちの　むかしにかへる　大江匡房(?)
拾遺愚草下　つくづくと　むかしにかへる　従三位頼輔(?)
新勅撰　ゆくへは　むかしにかへる　殷富門院大輔
玉葉雑一　郭公　むかしをしのぶ　従三位基輔
拾玉集四　さみだれに　むかしをおもふ
拾遺愚草上　静なる山路の　むかしをおもふ　右近法師
千載雑上　夕されば　むかしのあき　右大臣
新古雑上　今も猶　むかしのみ　上東門院大輔
風雅雑下　さやかなる月　むかしのひと　前中納言定家
続拾雑下　老らくの　むかしの　中務宣旨
後撰秋中　花のおきし　むかしの　前中納言定家
拾遺愚草上　あはれなる　むかしの　定家
拾玉集五　こころかな　むかしの
同　山がはや　むかしも今も　勅答

古今恋三　人しれず　むかしも　小野小町
後撰恋二　人はいさ　むかしも　紀貫之
新後雑中　ありし人　むかしも　伊勢
新千載下　おもひやれ　むかしも　権中納言定家
千載雑上　あるかなき世に　むかしも　法性寺入道
同釈教　あはれなり　むかしもかはらぬ　右大臣
続千雑上　雨風の　むかしもかはらぬ　前大僧正賢(?)
拾遺愚草　あつまより　むかしのまつ　信生法師
新続古雑中　何ごとも　むかしのあきの　花園院御製
続古雑上　老ぬれば　むかしの　皇太后宮大夫俊成
新古秋上　いとふべき　むかしのみ　藤原資宣
新後冬　今はとて　むかしもきて　僧正行意
新勅雑一　いつとても　むかしの　従二位家隆
拾遺愚草下　さ夜ふかき　むかしも
新拾雑中　ありし世を　むかしのせきの
拾遺愚草下　うけみてし　むかしせき
山家集上　ふるさとの　むかしのそで
玉葉秋下　秋までの　むかしのそでに　従一位実氏

壬生二集中 あさ嵐の山路より月や出ぬらん むかひの岑にのこる白雪 正三位家隆
後拾雑上 朝ぼらけ霧たちのぼる浦まで見え むかひの岑にかゝる白雲 土御門院御製
後撰羈旅 されつゝも伏見の里に宿るらく むかひの山に雲ぞかゝれる
壬生二集上 夕ぐれは[illegible]とゆく郭公 むかひの山に[illegible]
風雅秋中 くれかゝる園の松に[illegible] むかひの山をのぼる月影 徽安門院
拾遺哀傷 色も[illegible]秋は来にけり むかひの岑[illegible]
新千雑上 和歌の浦に心の松も[illegible] むよそぢの[illegible] 前大納言為世
山家集下 [illegible] むれゐる[illegible]
後拾遺冬 [illegible] むれゐる[illegible] 源すまく
新葉慶一 [illegible]芦べ[illegible] むれゐる[illegible] 中務卿宗良親王
拾玉集四 [illegible]山松[illegible] むれゐる[illegible]
後六々冬 [illegible] むれゐるたづの[illegible] 後京極摂政前太政大臣
月清集上 [illegible]川[illegible] むれゐる鶴の[illegible]
拾玉集二 [illegible] むれゐるつる[illegible]千代の数 後京極摂政太政大臣
新千慶賀 [illegible]萩の[illegible] むれゐる[illegible]千代の友 源実之
新後冬 湊[illegible] むれわたる[illegible] 前中納言為忠
後拾冬 風さむみ夕波さむき[illegible] むれてちる[illegible]浦の[illegible] 平政村朝臣

拾遺哀傷下 [illegible] むそぢあまりの[illegible] 前参議雅有
新千雑中 いつまでか[illegible]月[illegible] むそぢにかゝる袖の[illegible] 後宇治殿(?)
後拾秋下 老の世に秋の[illegible] むそぢまでみる月[illegible] 源頼長(?)
新勅雑一 [illegible] むそぢあまりの袖の月影 冷泉前太政大臣
新葉雑中 今あれば二代[illegible] むそぢにちかき[illegible]川 前大僧正[illegible]助
後拾雑上 [illegible] むそぢをすぐる[illegible] 鴨祐[illegible]
新拾雑上 [illegible] むそぢはるかに[illegible]
拾遺哀傷下 九重の[illegible] むそぢにあまる[illegible]
新千雑上 [illegible]しや[illegible]くらし[illegible] むそぢの松の[illegible] 三条入道[illegible]
玉葉雑一 [illegible] むそぢのあひの[illegible] 中宮権大夫(?)
後拾秋下 [illegible]月の[illegible] むそぢの秋の[illegible] よみ人しらず
新後雑上 [illegible] むそぢあまりの[illegible]月 静仁法親王
後拾雑中 [illegible]世の[illegible] むそぢのよはひ[illegible] 権中納言公雄
長秋詠藻 [illegible] むそぢの[illegible]
後撰羈旅 [illegible]松の[illegible] むそぢあまりの[illegible] 源[illegible]
風雅冬 [illegible]の[illegible]老のなみ[illegible] むそぢの[illegible] 後[illegible]院[illegible]
後拾雑下 [illegible] むそぢのそでを[illegible] 津守国助
新後拾下 今もなほ[illegible] むそぢあまりの[illegible] 前大僧正隆弁

後古今集 雑上
後拾遺雑中
同神祇
新後拾遺雑
後千載雑中
後拾遺春下
風雅春中
新拾遺
乙女
拾玉集一
玉葉二
拾玉集六
後古今集
山家集下
拾玉集六
玉葉二
後千載雑上
玉葉春上

ひさうこんのしろくまをぬく
みそまつふかきの光のそれもなし
雲ゐにうくまてつくしまてそつくしき
そらまでも世を流すかの中の空なれや
あらしのみ山なをいくへもちりぬらん
桜さく水うみかせのあけぼの
風ふけはなみのしらゆきかけもなし
今日こそは河波そひて春かすみ
雪のさえつる春かもしらく
ありあけの月のかけのうすくなり
もろともにいさよふ雲のはつかしき
ちりぬれはいつれのえたもかはらねん
何をかは数のことくにうつろひて
春はやよその花のみ
もろともにあはれとおもへ山桜
今こそ我も世にふるさとの
もろともにあはれとおもへ山桜
花よりほかに知る人もなし

古今誹諧
拾遺雑春
同上
後千載雑上
玉葉春上
新古今春
拾遺雑春下
古今六二
掛
山家集下
同上
新古今春
後千載雑上
後古今春
同
新拾冬
拾玉集四
後古今傷

人よあらん月はさやかにさしいれと
をのつからなる秋の夕暮
戦ふめりつらぬく波もくれなゐに
散るもみちはをうつすなるへし
玉ゐ川井堤の水のあさきよりいはねの
なみのたちもかくるる
もろともにあはれとおもへ山桜
君こすは誰にか見せん
花よりほかに知る人もなし
なけきつつ入る山の端の月をしも
うらめしかほにいふかしかな
里人のたきぎこりしく跡もなく
雪ふかき山の夕暮
水さえてしかまの池にすむ月の
かけもとまらぬ秋の夜の空
あはれとも思ふ人だにとひこかし
我すむ庭の秋の夕暮
雲ゐよりたえまなくちる花ふぶき
つもりて庭の雪となるらん
知らねとも今日こそとへ山桜
ちりなんのちの形見なるへし

十四 小町小町
基俊
慶政上人
今こそ我も世にふるさとの
紀貫之
山家集
家超法師
信生法師
後京極摂政前太政大臣
後鳥羽院
御製

拾遺愚草中　あふけともこたへぬ空のあをみとり　むなしくはてぬ行末もかな

横笛　よこ笛のこゑにへてもよそなきを　むなしくなりぬねさへつきせぬ　寂蓮法師

新後古今哀傷　露乃命とゝまらぬ世をさためなき　むなしくなりし人やうらみん　権中納言長方

玉葉哀一　人をまたぬ山の名にたつかねにしも　むなしくちさぬ契りまつれ　後京極摂政前太政大臣

新勅哀二　秋露のあさておきけるかりのよに　むなしきのこるをしらぬ袖かな　藤原盛長

同雑二　かはりゆくむかしの跡のしけき山の　むなしくちらん花のかきりを

壬生二百下　あはれまみしふりし世のうきにつけ　むなしくもなき年月の末

拾玉集二　人のよや我まつ身すこしたのむく　むなしくみてやみしにけるかな

新後古今三　つかへせんせめてもさはるやよひの　むなしくすさんかたきなをゆく　従二位家衡

拾玉集六　かすのまえ山のひとみくはかなや　むなしくなつかしかきりなき

拾遺愚草　きえぬともあすまれつ世にあかぬ所　むなしくのみ女郎花をのみ

風雅哀傷　まためぬと我もしかしからの国を　むなしくわくらうさきゆかれや　昭訓門院播磨

拾玉集四　まちかぬ水まつさくまの山を　むなしくさくやの花やおもへん

同　本はえ哉さへ行さくかなし　むなしくなりたつ夕附夜かな

同　とふみたるはをさかれなく事　むなしくなるあきをしらぬ人

続後拾遺雑下　かけなくぬかなかの蝉の世かりて　むなしくすきる妻の果も　昭慶門院一條

続拾遺雑中　山のふかき都てつくへき　むなしくすきて月日ひとり　縁忍上人

千載雑中　こけむそそひなへゆく人もなき　むなしきいろにまかり行　寂然法師

続拾遺秋　いく秋の花も紅葉もあたにして　むなしき空をすくる月かけ　前大僧正慈鎮

拾玉集又　おもひきやうきよのかちの風のうちに　むなしくなりぬとみゆる夕は

続後撰秋下　やもめにならひの空の月みて　むなしき空をひとりかそふる　中務卿宗尊親王

拾遺愚草下　秋の夕暮のかりこく木葉もしくて　むなしき跡はなかくあらん

玉葉冬　人はあさの夕の名もなくてしまふ　むなしきはしはみ木葉をまつ　よみ人しらす

雑本　なからんもけにとつゝ推木　むなしき秋のまつらなる

壬生二百下　よろこひも世をてみしれ袖の色　むなしき秋を来る真清の波

千載雑上　ふたりのすむけはまた袖をそて　むなしきをとまたくの名の風　後京極摂政太政大臣

新後拾遺三　あけはてつ伏見の里の名のみにも　むなしきとほりにさきの松に　皇太后宮大夫俊成女

新勅撰五　いつとせん夢路はさすらぬよは　むなしき秋をとりの袖　式子内親王

玉葉雑四　さうしんかたもなくれも空蝉の　むなしきからにはかなきの袖　中納言定頼

新拾遺一　おもひきやいかにも秋乃ちりなとや　むなしきをみるかたをしる　権少僧都覚雅

拾遺愚草下　をく袖もなくしてはあはれなれ　むなしき秋の風のこゝろ　三位家衡

続千載冬　あはれなる月日のなくなりにけり　むなしき浦に残る人　清原元輔

続後撰雑下　波のうへに消ゆる浦のみなとにも　むなしきうきをしのふの心　好忠

新後拾遺哀傷　わすれなん身のうへとそ思ふ　むなしき空に雲や消ゆる　素性法師

古今哀二　空にきえ残てはかなく　むなしき人や何にたちぬる　よみ人しらす

拾玉集四　ともにうき風をそれは何かは　むなしき秋をかそふる

新勅恋二　よそにのみおもひなれにし年ならん　むらすゝきつまやしのばん　御製

拾玉集七　あはれをもしるといふ人はあらじかし　むらすゝきちるはなすゝき　御製

続千恋五　いつはりとおもひもはてぬよのなかに　むらすゝきよにはつのこる　後宇多院御製

新続古雑上　秋の夜はかくやはありけん今宵明て　むらすゝきとまれ　權大僧都

続拾雑上　ながめやるわがふるさとの道の辺に　むらすゝきまほにいでける　藤原秀定

拾遺恋五下　末の露もとの雫の世のなかに　むらさき世にもしられず　大納言経継

新拾哀傷　わすれなん今夜の月をしのぶとて　むらさきこそ今はのこれ　前大僧正

新古恋下　花にちる風にあらそふ池の辺の　むらすゝきにも月をすみて　權大納言

新後人数　なかなかにきえてこそ人をも思はめ　むらすゝきゝこえくる　前中納言

新続古恋五　我恋はおもへどかひもなきものを　むらさきに時雨ふる　為氏

拾玉集七　是報如乃如くいかにせん　むらさきの雲を見ん月　前大僧正

続古秋上　くれなゐのいろにみえけん花すゝき　むらたゞよふ　權大納言

新古雑下　世中はおもへばはかなき物なれや　むらすゝきはらの露のまに　皇太后宮大夫俊成

続後撰恋五　山ざとのおくのかよひぢたえぬとも　むらさきに思ひいでん　よみ人しらず

拾玉恋二　わかれにし今朝の別のせかまほし　むらさきの雲のたな引　前大僧正

続後拾恋五　なにとなくわすれがたき世にしあれば　むらさきにほふ月影　寂然法師

新勅恋三　思ひとはなにとなけれど人の世に　むらさきをかくる月　小侍従

続後撰雑　我ながら思ひくらせる世にしあれば　むらすゝきをわけて　前大僧正慈鎮

月清集上　[illegible]　むらすゝきまねく秋の池水　後京極院御製

新千雑下　[illegible]　むらさきの雲居はるかに　大納言忠教

新勅恋五　恋しさに今はかぎりの命ならば　むらすゝきほにいでゝ　乳母

新古哀傷　あはれなる人のかたみの衣にも　むらさきの露とおもはん　民部卿

金葉恋下　うしとおもふ心のうちのはかなさを　むらすゝきとてもしる　権大僧都

新古哀傷　山ざとの人の心もなぐさまで　むらさきのおもかげ　前中納言

新葉恋上　世中はおもひしにもまさりけり　むらすゝき秋の夕暮　前大納言

続後拾雑　さらに思ひよりぬる　むらすゝき秋の夕暮　前大納言為定

新千秋上　いつとなき思ひをそれとしらねども　むらすゝき秋の夕暮　後嵯峨院御製

月清集下　たまゆらもおもひわかぬ夜半の　むらさきの雲の色　侍従

拾玉集七　今よりはいとゞいかにぞ思ひしる　むらさきの雲のかゝる　院御製

続千雑上　まさりける人の心の浅茅原　むらさきの色にかゝる　後鳥羽院

続後撰恋五　いかにせんうきにつけてもあはれなる　むらさきの色をもとめて　一條院内侍

続古恋二　我恋は人にしられぬ谷水の　むらすゝきのながれて　式子内親王

大和物語　うらめしく思ひつる人の世の中に　むらさきのゆかりのうつり　あてたかき人

新後雑上　我世をば人もまたかくあるべしと　むらさきの色にほふ　院御製

新続古恋二　思ひしり今もむかしも人ならで　むらすゝきをわけくる　橘兼吉

新拾遺雑四　うかりける人の心のうちをしれ　むらさきをわけてみん　馬内侍

新拾哀傷　寂きよりしゆうとをくやみ
拾玉集一　さゝきくてあつ海やつあよ約
拾遺愚草　あるくものひしるまよあつの
殊玉撰之義　約つ風をうみまれ中空よ
玖拾遺雑　住吉神へ表とたりて年
風雅雑下　山里ゝちうき新古今池ふう
拾玉集三　住吉乃神へなうともうそあん
同　ゝ多海ゝて表もあるなひ世外
殊拾雑下　乃ゝくの冬もる里へまる神
新後撰雑下　もるめきてくく敷ぬあ表
玖拾遺雑一　かつ衣そゝみ浦乃うつ世見
新古今二　つゝもる乃くの冬ふんゝを
殊玉集三　もるきそひの抱ちまよ
玖撰友　ちてくく寄もるゝひ新なるの
新古今下　もるきそ海ゝて表ゝ
月清集下　吉野山乃乃ふあてく
同上　もるき枝の月を抱ろ
新勅尺会　ちむれんのそうよ雪ふく
　　寿成門院
　　もるきのくて秋風ふ吹
　　もるきかふくれ立ち
　　ありくものひしるまよあつの
　　殊玉撰之義
　　約つ風をうみまれ中空よ
　　玖拾遺雑
　　住吉神へ表とたりて年
　　山里ゝちうき新古今池ふう
　　住吉乃神へなうともうそあん
　　同
　　殊拾雑下
　　乃ゝくの冬もる里へまる神
　　玖拾遺雑下
　　もるめきてくく敷ぬあ表
　　新古今二
　　かつ衣そゝみ浦乃うつ世見
　　殊玉集三
　　つゝもる乃くの冬ふんゝを
　　玖撰友
　　ちてくく寄もるゝひ新なるの
　　新古今下
　　吉野山乃乃ふあてく
　　月清集下
　　もるき枝の月を抱ろ
　　同上
　　新勅尺会
　　ちむれんのそうよ雪ふく
　　後二住乃神
　　玖二條院御製
　　山里ゝちうき新古今池ふう
　　住吉乃神へなうともうそあん
　　俊恵僧都
　　乃ゝくの冬もる里へまる神
　　花束深秋
　　花束深秋
　　八條院ゝ
　　四二住為家
　　ちうくふ吹
　　指吹ふ
　　順徳院御製
　　信生法師

新古今哀傷　ふりとつもるゝ
拾遺愚傷　かをみ海てとれ人も海ゝき
拾遺愚草　もるき日のゝうふ
風雅雑中　乃海せもるの日新ゝ
殊拾冬　山川乃水もる紀秋のゝ
玉葉冬　山あくの枝の葉そふ
風雅冬上　もゝいまるあさきよ新
新後古春上　ゝきのゝ抱ゝ雪ゝきやて
新拾冬　もるのゝ抱くそうゝ白雪
風雅冬　もるくかとゝ雪もゝ
同秋中　月れゝゝ抱ろ
玉葉冬　もるくろき秋のうそ
同雑四　明海乃波波のゝ
殊冬　もゝ新山畑のまゝ
新葉秋下　久時ゝるふ新山のそ
拾遺愚上　ゝもゝ抱ゝ風ゝ
殊冬　もるくもあふうき
玉葉冬　もるくもあふうき

新古今哀傷　ふりとつもるゝ
拾遺愚傷　かをみ海てとれ人も海ゝき
拾遺愚草　もるき日のゝうふ
風雅雑中　乃海せもるの日新ゝ
殊拾冬　山川乃水もる紀秋のゝ
玉葉冬　山あくの枝の葉そふ
風雅冬上　もゝいまるあさきよ新
新後古春上　ゝきのゝ抱ゝ雪ゝきやて
新拾冬　もるのゝ抱くそうゝ白雪
風雅冬　もるくかとゝ雪もゝ
同秋中　月れゝゝ抱ろ
玉葉冬　もるくろき秋のうそ
同雑四　明海乃波波のゝ
殊冬　もゝ新山畑のまゝ
新葉秋下　久時ゝるふ新山のそ
拾遺愚上　ゝもゝ抱ゝ風ゝ
殊冬　もるくもあふうき
玉葉冬　もるくもあふうき

殊玉撰之義　約つ風をうみまれ中空よ
玖拾遺雑　住吉神へ表とたりて年
風雅雑下　山里ゝちうき新古今池ふう
拾玉集三　住吉乃神へなうともうそあん
同　ゝ多海ゝて表もあるなひ世外
殊拾雑下　乃ゝくの冬もる里へまる神
新後撰雑下　もるめきてくく敷ぬあ表
玖拾遺雑一　かつ衣そゝみ浦乃うつ世見
新古今二　つゝもる乃くの冬ふんゝを
殊玉集三　もるきそひの抱ちまよ
玖撰友　ちてくく寄もるゝひ新なるの
新古今下　吉野山乃乃ふあてく
月清集下　もるき枝の月を抱ろ
同上　秋風ふ吹
新勅尺会　ちむれんのそうよ雪ふく
寿成門院　後二住乃神
俊恵僧都　玖二條院御製
花束深秋　山里ゝちうき新古今池ふう
花束深秋　住吉乃神へなうともうそあん
八條院ゝ　俊恵僧都
四二住為家　乃ゝくの冬もる里へまる神
ちうくふ吹　花束深秋
指吹ふ　花束深秋
順徳院御製　八條院ゝ
信生法師　四二住為家
　　ちうくふ吹
　　指吹ふ
　　順徳院御製
　　信生法師

玉葉冬　　歳ふるまゝの葉もちるを　　永縁二條院
風雅秋中　　いまよりと風うちそふる　　閑白左大臣
拾遺春上　　わすれ水こゝろとけゆく　　
後拾遺秋下　　氷上よりもちるもみぢ　　堀河右大弁
山家集上　　木枯のみなのりをやこゝ　　
後々葉下　　松の色にみをなしてく　　法皇御製
後古秋下　　初もみぢうつろふ　　太上天皇
拾遺春秋　　いつもてあそぶ花鳥　　
拾遺春上　　秋のおりしもきえ　　中務卿宮
壬生二荒上　　しぐれてそ　　
玉葉秋下　　雲をあらしの　　皇后宮
新拾雑上　　山ふもとしのぐ　　大弐三位
同秋下　　風をまつ　　
新後拾雑秋　　紅葉ちりしく　　
拾遺春上　　秋のおりしも　　章義門院
玉葉夏　　しぐれもあへ　　
山家集下　　ちるもみぢ　　
玉葉雑一　　やどりをかへる　　
拾玉集四　　もみぢのにしき　　

玉葉雑一　　さゝ波やゝ宮もりうた大の　　院御製
拾玉集一　　春すぎよ法こそ花もとゝ　　
月清集下　　露乃しらたまもみぢ　　
千載雑中　　もりもりたれ松の枝に　　
玉葉雑四　　歌よりも涙もふるき　　
後拾遺雑四　　袖ぬれてとゝまるへ　　
新古秋上　　もゝとせの後もこゝ　　
玉葉雑二　　ふるさとの秋の夜　　
後拾遺雑二　　思ひやれ秋のゆふ　　
新古秋上　　もゝとせの秋のゆふ　　
拾遺春上　　ふるさとの花のもと　　
拾玉集一　　ありふりぬ世のうき　　
同四　　神よりもうき世の　　
後拾遺雑二　　もゝとせの後もこゝ　　
新後拾雑二　　さゝ波やゝ宮もりうた　　
後古秋上　　おもひやれ秋のゆふ　　
拾玉集六　　ありふりぬ世のうき　　

新拾遺恋二　あふまでのむなしき月日かぞへつゝ　むくひなれてうき我身かな　前中納言為長

壬生二恋下　雉子鳴くむかしの跡をたづぬれば　むかしの宿に残る松風

山家集下　こゝろとも[illegible]　むやかしの[illegible]

千載雑中　いまはとていはねの松[illegible]　むかしの[illegible]世の[illegible]　源師光

拾遺恋五　かへりては[illegible]つゝ[illegible]　むかしの[illegible]

同　かのきしに[illegible]　むかしのひかり[illegible]

万葉恋一　かくばかり[illegible]　むかしの[illegible]　賀茂重保

同雑五　思ひやる[illegible]　むかしの[illegible]　高弁上人

拾玉集七　昔人の[illegible]　むかしの[illegible]

拾遺物名　玉まつる[illegible]　むかしのいりて[illegible]

後拾遺雑上　住吉の[illegible]　むこの[illegible]　同

壬生二恋上　[illegible]　むこの[illegible]ならん

拾玉集三　[illegible]　むかしは[illegible]

同又　[illegible]　むかしは[illegible]

山家集　郭公[illegible]　むかしは[illegible]

拾玉集四　[illegible]　むかしと[illegible]

新勅撰恋上　いかにせむ[illegible]　むかしの[illegible]　九条右大臣

拾玉集三　[illegible]　むかしの[illegible]

新千載夏上　夏風は宿の[illegible]　むめがかの宿の[illegible]　後伏見院御製

山家集上　[illegible]　むかしの[illegible]

新拾遺春上　[illegible]　むかしの[illegible]風[illegible]　前大納言[illegible]

後撰雑上　[illegible]　むかしの[illegible]　従二位家隆

新続古今雑上　[illegible]　むかしの[illegible]風　平時高

風雅春上　[illegible]　むかしの[illegible]風　進子内親王

新後拾遺春上　[illegible]　むかしの[illegible]風　[illegible]入道[illegible]

万葉春上　[illegible]　むかし[illegible]　皇嘉門院[illegible]

拾遺賀下　[illegible]世[illegible]　むかし[illegible]

拾遺春上　[illegible]　むかしの[illegible]　[illegible]言[illegible]

後拾遺春上　[illegible]　むかしの[illegible]

拾玉集七　[illegible]　むかしの[illegible]

後撰恋上　[illegible]　むかしの[illegible]　よみ人しらず

拾遺雑恋　[illegible]　むかしの[illegible]　中務卿具平親王

後撰春上　[illegible]　むかしの[illegible]　よみ人しらず

壬生二恋中　[illegible]　むかしの白[illegible]

末摘花　[illegible]　[illegible]

後千載恋上　香[illegible]　[illegible]　二品[illegible]

拾玉集一　山さとの梅のそこここ咲そめて
風雅春上　一村の霞のそこそこ匂ひゆく　徽安門院
壬生二品下　梅のかをりもやきのの山風も
拾遺雑春　梅なをふく水のうへかな　平経章卿
風雅春上　梅ちるやうつの白ひるうれ　権大僧正公朝
拾遺雑春　梅ちるはるの更ぬまくら
拾遺春上　梅ちるはるの更ぬまくら　権大僧正公朝
玉葉春上　梅ちるはるの更ぬまくら
新拾春上　春風のふきとくるまに
風雅春上　梅さくやとをつくそとふく
新勅春上　梅さくやとをつくそとふく　侍従為親
壬生二品上　梅さくやとをつくそとふく　入道前大納言為世
拾玉集七　梅さくやとをつくそとふく　四三位為俊
新葉春上　梅さくやとをつくそとふく　適照光院入道前太政大臣

拾玉集五　なほそれかこれかの梅のにほひかな　静賢
新勅春上　梅ちるとみるまに月のうつりかな　千観法師
千載雑中　今あらばいつかは春をまち出てむ
山家集下　みく野はむめさきにけり　和泉式部
新古秋下　秋風のふきにしかひもなかりけり
月清集　月清かりし山のかけかな
壬生二品上　夕霧のへのひろ野をそめて
千載秋上　ゆふされはやとの荻の声
新続古秋　雲はれぬ秋の夕風そふくなり　中務卿具平親王
同雑上　雲はれぬ秋の夕風そふくなり
同秋上　雲はれぬ秋の夕風そふくなり　源具親朝臣
新拾秋下　夕されは一むら雨のふきすぎて　僧正果守
山家集上　風雅秋下　雲はれぬ秋のゆふ風
新勅秋下　雲はれぬ秋のゆふ風　永縁法師
新葉秋下　秋されはいかてもとまるものかは
詞花秋　八重葎しけれる宿もいとはしな

古今秋上　よそにのみあはれとそみし秋の野の　むすひもとめぬ露そおきける　よみ人しらす
拾玉集一　ときはなる松のみとりもぬれにけり　むすふ手のしつくにそゝく秋の村雨
拾遺愚草上　さそはれて野への秋風吹わたる　むすひすてけるつゆのしらたま
後拾遺秋下　ふるさとは浅茅か原とあれはてゝ　むすひのこせる露のしら玉　隆源法師
玉葉秋下　露はかり袖たにぬれし秋の夜の　むすふ手のうちに月そやとれる　後鳥羽院
後拾遺雑二　流れての名にそたちぬる涙川　むすふ手ことにかけてそみる
月清集下　思ひ入れおもひいれても山水の　むすひあけぬるすゝしさそなき
拾遺愚草上　ある時はもの思ふ宿の水なれや　むすふ手ことに袖そぬれける
玉葉雑一　おもひきや雲ゐの月をよそにみて　むすふ手もなき夏の下水　前中納言定家
風雅二　ゆきもやらぬ清水の流れすゝしくて　むすふ手にさへ秋風そふく　右大臣
月清集下　浅芽生の露もはらはぬ夕くれに　むすひとめたる草の枕は
後拾遺一　小山田の庵もる人の夕煙　むせふとのみやよそに見ゆらん　顕季
月清集下　秋の夜の月に袖ひきこゝろして　むせふ涙の袖のしつくは
後拾遺一　春のくる道もさりあへぬ氷こそ　むすほゝれたるとけぬなりけれ　中納言
拾遺愚草上　みそきする河瀬のなみのしら木綿を　むすひとめける袖のしつくに　後久我内大臣
新葉二　春の日のかけものとけき山河の　むすひおけりし氷とくらし
同　いかにせん氷のしたにたえてゆく　むせふなみたのせくかたもなし　冷泉入道前右大臣

新古今哀傷　思ひ出る折りたく柴の夕煙　むせふもうれし忘れかたみに　太上天皇
新勅撰二　いつまてかあさきたのみの水の上に　むすはぬ袖そ露もかわかぬ　関白左大臣
拾遺愚草　さつきまてそのゝ清水岩にこそ　むすふ袖にも秋風そ吹　殷富門院大輔
新勅撰二　ゆふくれて逢坂山の岩清水　むすはぬ袖もまつしめりけり　源師賢朝臣
後拾遺夏　さ夜ふかき岩井の水の音きけは　むすはぬ袖もすゝしかりけり　源師賢朝臣
後拾遺四　夏衣たちゆく水のおとはして　むすふ手ことにあはぬ夜半かな　前太政大臣
玉葉二　山かけの清水をいけにせきとめて　むすふたもとにすゝしさそそふ　藤原家経朝臣母
新後拾遺雑上　春の日のうつろふ水の岩ねより　むすひしものをたえてゆくらん　和泉式部
拾遺愚草下　露しけき秋のゝ草のしのふにも　むすひの人の心しらなん
後拾遺雑一　松かねの岩もる清水せきとめて　むすはぬさきにすゝしさそしる　源季広
拾玉集一　山の井の氷の岩にかゝりつゝ　むすひそへたる涼しかりけり
新古今冬　杉のはも緑もかはる泉河　むすはぬ水のかけそさひしき　前大納言
新後拾遺雑上　風ふけは露のおきつる秋萩の　むすひはなれぬ枝のしつくに　前参議雅敏
拾玉集五　杉の庵かりにのみゆく秋の月　むすふ手ことに袖のみそしる
同　杉の庵ゆくへもしらぬ谷の月　むすふてにさへ月そやとれる　定家
千載二　おもひかね人めのみゆく水なれや　むすひとめける袖のうへの露　大納言公実
拾遺愚草下　もとの月はしかすかにそのなか川　むすはぬ水とよそに見えける
金葉二　ことしけき人のこゝろのすゝしさに　むすふ手風はよその秋風　兼済

新拾夜　夜衣きものゝ袖の濡しさへ　大輔伊勢心雲雅
拾玉集云　雪ふかき山のきのふのそらみもあるなる
名寄夜　君まもる風の音さへ澄わたり　前大納言為家
河名所　つるの声ふもとのさとはかつ寒し　源重之
拾遺恋三　恋ぢとて柳もみどりなるものを
金葉春上　かくとだにえやはいぶきのさしも草
後古春上　さもやとは思ひもよらず
総角　なれそめしうらみもとけぬ
俊拾恋四　みそぎ川ながれて絶ぬ中なれや　紫式部
風雅夜　もゝとせもかはらぬ水にすむ月の
後拾秋下　世にもれて山田のいほにすむ人は　源重之
拾遺雑春　永日もまだ春ながらくれ
新古秋上　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の
新後古春　うらびれてかすみこめたる
新拾秋上　かくとだにえやはいぶきのさしも草
風雅夜　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の
後拾秋下　世にもれて山田のいほにすむ人は　源重之
拾遺雑春　永日もまだ春ながらくれ
新古秋上　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の
新後古春　うらびれてかすみこめたる

拾遺雑春　けやきの水のもりもみどり
拾遺雑春　春の夜の夢の浮橋とだえして　紀貫之
玉葉夏　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の
新古秋上　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の
拾玉集二　夜もすがら雨ぞ降らん　上西門院兵衛
後夜　もゝとせもかはらぬ水にすむ月の
拾遺夏上　きりぎりすなくや霜夜のさむしろに　中務
新夜　すのゝ内の郭公
拾遺雑上　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の
後拾　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の
新古秋一　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の　式乾門院御匣
後拾雑二　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の　和泉式部
拾遺雑春　春の夜の夢の浮橋とだえして　普光園院
後拾雑二　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の　権中納言朝忠
新古秋上　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の
後拾雑二　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の　清少納言
新古秋上　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の　藤原為家朝臣
後拾雑二　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の　清少納言
新古秋上　ながめつゝ思ふもさびし秋の夜の　藤原為家朝臣
壬生二荒下

新古今一　秋の夜の月の光しあまりにて清きなかるる雲の通ひ路　寂蓮法師
新千載三　秋風の雲吹きはらふ夕空に月の光を待ちいでつる　源親行
拾玉集五　雲ふかき峰の梢をもる月の光ぞ秋の夜半の景色
後千載三　秋風の雲吹きはらふ夕空に月の光を待ちいでつる　源親行
後拾遺雑二　秋の夜の月の光しあまりにて清きなかるる雲の通ひ路　寂蓮法師
玉生二承下　秋の夜の月の光しあまりにて清きなかるる雲の通ひ路　寂蓮法師
後千載雑二　秋の夜の月の光しあまりにて清きなかるる雲の通ひ路　寂蓮法師
同
新古今雑歌　嵐こそ峰の木の葉を吹きはらへ月の光を待ちいでつる　源親行
拾玉集四　嵐こそ峰の木の葉を吹きはらへ月の光を待ちいでつる　源親行
拾遺愚草上　嵐こそ峰の木の葉を吹きはらへ月の光を待ちいでつる　源親行
拾遺愚草員外上　嵐こそ峰の木の葉を吹きはらへ月の光を待ちいでつる　源親行
後古今雑歌　嵐こそ峰の木の葉を吹きはらへ月の光を待ちいでつる　源親行
後千載雑二　嵐こそ峰の木の葉を吹きはらへ月の光を待ちいでつる　源親行

玉生二承上　清澄めさやかに月の澄みのぼるかきねの竹の夕風　藤原定家
同　清澄めさやかに月の澄みのぼるかきねの竹の夕風　藤原定家
後千載雑二　清澄めさやかに月の澄みのぼるかきねの竹の夕風　藤原定家
新古今秋下　月の光清くさやけき秋の夜の風にたぐへる荻の上の声　藤原定家
拾玉集一　月の光清くさやけき秋の夜の風にたぐへる荻の上の声　藤原定家
拾遺愚草上　月の光清くさやけき秋の夜の風にたぐへる荻の上の声　藤原定家
拾玉集二　月の光清くさやけき秋の夜の風にたぐへる荻の上の声　藤原定家
新拾遺三　月の光清くさやけき秋の夜の風にたぐへる荻の上の声　藤原定家
拾玉集二　月の光清くさやけき秋の夜の風にたぐへる荻の上の声　藤原定家
新古今秋上　秋の夜の月の光し清ければ雲井に見ゆる天の川波　藤原家隆
新千載三　秋の夜の月の光し清ければ雲井に見ゆる天の川波　藤原家隆
同
後千載雑二　秋の夜の月の光し清ければ雲井に見ゆる天の川波　藤原家隆
大和物語　秋の夜の月の光し清ければ雲井に見ゆる天の川波　藤原家隆
風雅雑中　秋の夜の月の光し清ければ雲井に見ゆる天の川波　藤原家隆

長秋詠藻
後古秋上
月清集
新千秋下
新拾雑上
後拾遺哀傷
後千載雑下
新後撰雑上
拾玉集冬
拾遺愚二
新続古二
新葉雑下
後拾雑秋
猿夜三
新拾冬
月清集上
拾遺愚二
新続古二
新葉雑下
後拾雑三
新後撰雑上
拾玉集冬
拾遺愚二
後拾雑秋
同夜
新千載上
後拾遺哀傷
新拾雑上
秋
新古二
後古二
後千二
新拾雑上
拾遺愚二
後拾雑秋
新古二
後古二
後千二
新拾雑上